

## 白隠禅師シンポジウム講評と総括

芳澤 勝弘（花園大学国際禅学研究所顧問）

芳澤です。お疲れさまでした。午前午後と合わせて9名の発表が続きました。私も大変疲れました。人の発表を聞くのがこんなにしんどいものかと痛感しました。

最初に、午後に発表した4名についての簡単な講評をします。千坂さんは、かねてから道歌を採り上げて整理し研究して来られました。道歌は墨蹟に残されていますが、白隠の墨蹟調査はまだ途中です。これからもっともって出てくるのではないかと。そして、特に道歌のようなものは、場合によっては短冊に書かれていたりして、なかなか発見されにくいのです。これからも随分たくさん出てくると思います。千坂さんはまだお若いので、ぜひ頑張って整理してください。そして、できれば、白隠だけではなく、禅宗のほかの祖師方の道歌を時間順に並べて整理していくと、大変面白いことが出てくるのではないかと。例えば、夢窓国師の和歌を、後世で盛んに採り上げているということもあるので、そういう点で、これから時間をかけて整理してください。

村上さんの発表は、「慈雲尊者と臨濟禅」です。村上さんのご自坊は、確か若狭の円照寺でしたね。白隠禅師が若いときに、わざわざ若狭の円照寺まで訪ねています。しかし、そこでどのような出会いがあったかは、細かいことが記されていません。前から気になっていました。

慈雲尊者というと、戦前から白隠と慈雲尊者の墨蹟を大変興味を持って収集する墨蹟愛好家が居て、白隠と慈雲はよく並べられていましたが、村上さんの発表は、慈雲尊者と東嶺禅師の關係に注目し、東嶺禅師の背景に白隠の影があるのではないかとという発表でした。私は慈雲尊者については詳しくないので、ここに挙げられた資料を一応読みましたが、私の分からないところも多いので、注目して勉強していきたいと思います。

3番目の西川さんは、かねてから黄檗禅と白隠に注目して来られました。白隠が小さい頃に黄檗禅が

日本に入って来たのですが、たしかに白隠は黄檗禅を批判することがあります。最後のところで、無著道忠禅師の影響もあるというお話で、『黄檗外記』という、無著道忠禅師には大変口汚い、黄檗批判の書物を見ていたのではないかと話がありましたが、私は、多分、見ていないと思います。

白隠と無著道忠禅師の接触はありました。白隠が60代のときに、「人天眼目」に出てくる分からない所を、手紙で無著禅師に尋ね、それに対する返事を無著禅師からもらって、大変喜んでその感謝の気持ちを長い手紙に書いてあります。

昔は、もっとも尊敬する人に手紙を出す場合には、直接出さずにある人を媒介して出します。妙心寺の養源院和尚宛に書き、養源院和尚を通じて無著道忠に感謝するという形式になっています。この手紙が、ありがたいことに禅文化研究所に残っています。この時代、続け字で書くのが普通の草書ですが、本当に礼を尽くすときは楷書です。その白隠禅師の手紙は楷書で書かれています。

この時代の禅界を代表する学僧である無著道忠と、新しい白隠禅を打ち立てた駿河の白隠の二人に交流があったことは、日本禅宗史にとって大変喜ばしいことであり、しかも、そのことを証明する書簡が、この花園大学内の禅文化研究所にある。これもまた大変喜ばしいことです。これは確か、私がかつても尊敬する白隠研究者であった陸川堆山居士から寄贈されたものです。そのうちに、ぜひ、展示して皆さんに見てもらえる機会をつくってほしいと思います。

4番目は、瀧瀬さんの愚堂と白隠との關係でした。その発表の最後のほうには、黄檗との關係も少し出てきました。白隠は愚堂禅師を最も尊敬していて、自分が愚堂の後継者で、間に至道、正受老人の二人をおいて、その愚堂の法を継いでいるという、大きな自信を持っていました。黄檗禅が日本に入ってきて、徳川将軍家の保護もあって大きく発展する中で、やはり愚堂以来の妙心寺派の考え方があって、黄檗

に対する批判もあったのだと思います。

一つ、つまらないことを思い出しました。黄檗の中国人の僧が日本には禅があると聞いてやってきたのですが、日本の臨済宗の僧を見ると、酒は飲む、たばこは吸うという具合で、いったいどうなっているのかと、大変びっくりしました。白隠禅師はたばこを吸って、結局、晩年までやめることができませんでした。今日は戒律の問題がいろいろありましたが、ここに日本臨済禅の一つの特徴が表れています。その辺の肌合いも黄檗とは合わなかったのではないかという感じがします。以上、簡単ですが、午後の発表に対する講評です。

さて、総括です。これはとてもやっかいで、なかなかできません。臨済禅師1150年・白隠禅師250年遠諱という宗門挙げての事業がスタートして、その遠諱事務局でこのようなシンポジウムを企画されました。そして、多くの人から論文を募って発表する機会を設けてはどうかということで、9編が集まりました。

最初、私と野口先生とで、それらを選別して欲しいという話でした。選ぶということは、優劣をつけるということです。私は、それはちょっとごめん被りたいと。やはり、こういうものは、優劣をつけるべき性格ではないし、優れて学術的な学会シンポジウムというわけでもないの、さまざまなアプローチがあっただけではないか。

馬祖禅師は、「石頭和尚のところでは純金を売っておる。しかし、私のところは雑貨舗だ」と言いましたが、シンポジウムはまさに雑貨舗です。いろいろなものが出ていいだらうと。特に、宗教に関するものなので、いろいろあってもいいと思い、このような冊子にまとめてもらいました。

これは、中身がいいか悪いかということではなく、250年遠諱のときにこういうことがあったということが、また後世になって点検できます。50年のちには、恐らくまた白隠禅師300年も行なわれると思います。臨済とセットにしているから、50年後もセットにならざるを得ないでしょう。そのことは誠に慶賀すべきことだと、私は思います。

妙心寺派では「遠諱」と称することはできないで

しょうが、このたび、白隠禅師の遠諱が臨済宗、黄檗宗挙げて実現されたということは、誠に慶賀すべきことで、関係者の和尚様方は本当にご苦労があったと思います。これから50年のちに、白隠に対する理解がどうなっているか、さらに進んでいるのか、さらに忘れられているのか分かりませんが、会場に居る中で若い人は、多分、あと1回は経験すると思います。それまで精進してください。

総括に代えて、私の個人的なこれまでの白隠研究についての簡単な総括をします。今から50年前、やはり白隠禅師の遠諱がありました。これは、龍沢寺や松蔭寺でなされました。その50年前の100年前もやはりありました。150年前はどんなことがあったのか。鎌倉の円覚寺、建長寺辺りを中心に『禅道』という雑誌が出されていて、それが「白隠研究」の特別号を出しています。その編集をしたのが鈴木大拙先生です。これには各派の師家方の偈がずらりと載っております。

そののちの200年のとき、私は、ちょうど京都に来ていて学生でした。山田無文老師の提唱などを聞いたことはありましたが、白隠禅師についての催しは特になかったと思います。そして、今回、このようなことが行なわれました。それは大変素晴らしいことだと思います。

さて、白隠の研究は、概して言えば、極めて低調だったと思います。「臨済宗中興の祖」あるいは「500年間出の大和尚」とたたえられているのに、どうしてそういう研究ができなかったか、あまり見られなかったのか。

昭和10年に『白隠和尚全集』が刊行されます。大変立派な仕事です。戦前のことなので、漢文語録は原文を並べたまま、また、仮名法語にしても、調べてみれば読み間違いもたくさんありますが、とにかく、昭和10年に『白隠全集』が刊行されました。これは一大事業でした。

そのときに編集を企画した人たちが資金を集める奉加帳が円町の法輪寺に残されております。立派な厚い紙でできた大きな奉加帳です。法輪寺の前々住職の後藤伊山和尚が、その編集の責任者でした。そこに連ねられた芳名を見るとびっくりです。当時の

政財界、言論界の著名人が名を連ね、お金も寄付されているのです。

例えば、石井光雄という人は、日本勧業銀行の総裁で、松ヶ岡文庫にある禅籍を収集した人です。徳富蘇峰の名前もあります。変わったところでは、来日していたロシアの歌手シャリアピンの名もありました。そして、途中から各本山の管長の名前が連なっている。こうして、『白隠和尚全集』刊という大事業ができたのです。これは素晴らしい資料だと思っ、私は禅文化研究所に居るときに複製を作っておきました。このように、その時代その時代で行なわれた記録をしっかり残していけば、後世の参考になります。

こうして、戦前に全集が出たのですが、それから研究はさほど発展していないように思います。私はたまたま不思議な縁があって白隠禅師の勉強をすることになりましたが、今考えているのは、なぜ白隠禅の研究が低調だったかということです。

大体3つの理由があるのではないかと。1点目は、臨済禅の本質的な性格です。修行道場における公案を中心とした修行が第一であって、文字の詮索はまかりならんという体質が研究を阻んできたのではないかと。

2点目は、『禅道』の100周年特集の編集をした鈴木大拙先生が、実は白隠研究をほとんどしておられません。白隠について何篇から小文を書いています、別に大したことはない内容です。50年ほど前に筑摩書房から『図録白隠』という立派な図録が出ましたが、その最初に鈴木先生が求められて序文を書いています。少しく白隠のことが書かれていますが、あと書かれているのは仙厓や盤珪の話です。禅の大学者である鈴木大拙先生に白隠論が少ない。これは、私にとって大きな不思議の一つです。鈴木先生はお若いときに、鎌倉円覚寺で白隠禅に参じられた。白隠禅をやっている人が、なぜ白隠に関心を示さなかったのか。ところが一方では、盤珪についてはあれだけの著作をしています。どうしてであろうか。これが白隠研究が低調だった一つの原因ではないかと思ひます。もし鈴木先生が白隠研究に着手しておられたならば、後世の研究者はそれに追随し、

多くの論を述べていたことと思ひます。

3点目は、私が痛感しているところで、戦後の禅学の影響です。今から50年くらい前に、初期禅宗の研究から始まって、唐代の禅録を正しく新しく読み直そうという動きがあり、この花園大学・禅文化研究所を中心にそういう雰囲気が大いに高まり、外国の研究者も大勢参加しておりました。新しい語録の研究の方法論が提唱されたわけですから。

こうした中で、禅の本格的な研究は中国の語録、しかも唐代の語録の研究にあるというのが主流であり、日本禅、いわんや白隠禅の研究などは低く見られていたのではないかと。「私は白隠をやっています」などという、小ばかにされるような雰囲気がずっとありました。こうした流れの中で、「臨済禅中興の祖」、「500年間出」と言われる白隠の研究に着手する研究者は少なかったのではないかと思ひます。

しかし、今や違います。250年を迎えて、このような盛大な遠諱記念行事が行なわれ、これからもまだ続きます。そういう中で、新しく白隠を捉え直していく努力は、さまざまな分野でなされなければなりません。

私は、白隠禅師の勉強をしてきましたが、白隠禅師の全てがいいとは思っていません。問題もあります。何せ古い、300年も前の人です。もちろん、300年前でも、現代に通じる内容はいくらでもあります。しかし、通じないものもあります。仮名法語の中には、やはり現代ではこんなことを言っても駄目だろうというものもなくはない。そういうことも踏まえて、宗門の大きな法財として、これからさらに解釈し直し、あるいは整理し直して、新しい時代の宗門の方向を示すものになっていけばありがたいと思ひています。

前半では、禅画、墨蹟の話などもありました。二玄社から1050点を収録した図録を刊行したのは7年前のことですが、それ以降でも、「こんなものが出てまいりました」と、私どもに寄せられる情報があります。私が見たことのない墨蹟、禅画あるいは文言が、多いときで年間に100件くらいあります。先般、この連休の間にサンフランシスコに行っていました。サンフランシスコにアジア美術館という、西

海岸ではアジア美術を最も広く集めた美術館を訪れたときに、収蔵庫に案内してもらいました。そこには、最近、寄付されたコレクションの中から、白隠の作品が12点用意されていました。どれも素晴らしいものでした。私が見たことがない賛が付けられているものもありました。というわけで、これからそういうものもどんどん出てくるのではないかと思います。

ます。

そして、次の世代がさらに興味を持って研究を続け、それが宗門の役に立つ方向に向かっていけばと思っています。以上、かなり私的なことになりましたが、総括に代えます。本日はありがとうございました。